

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士（心理学）	氏名	安 部 主 晃
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
再確認傾向が精神的健康に影響を及ぼすプロセス —対人ネットワーク利用の観点から—			
論文審査担当者			
主 査	教 授	岡 本 祐 子	
審査委員	教 授	森 永 康 子	
審査委員	教 授	杉 村 和 美	
審査委員	准教授	中 島 健 一 郎	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、再確認傾向の強い個人が精神的健康を棄損するプロセスについて、感情制御のための対人ネットワーク利用（Emotionships）の観点から検証したものである。以下の3つの章から構成されている。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」は、第1節「再確認傾向 - 対人関係の悪化を招く要因」、第2節「再確認傾向が精神的健康を悪化させるプロセス」、第3節「Emotionships - 感情制御のための対人ネットワーク利用」、第4節「感情制御の対象となる重要他者の特性」、第5節「本研究の目的」から構成される。</p> <p>第1・2節では再確認傾向の概念的定義を行うとともに、それが精神的健康を棄損するプロセスについて説明している。そして、第3節では Emotionships について概説した上で、その観点から当該プロセスを整理している。さらに、第4節では精神的健康を棄損するプロセスを調整する要因として、重要他者の特性に着目する必要性について述べている。最後に第5節では、先行研究の問題点として、感情制御時の対人ネットワーク利用が考慮されていないこと、そして重要他者の要因に着目した検討も不足していることをあげ、その解決が学術的・臨床的意義につながることを改めて主張している。その上で、本論文の目的として次の2点をあげている。第1は、再確認傾向と Emotionships、精神的健康との関連を検討することであり(研究1・2)、第2は一連の影響過程を重要他者の特性が調整するかどうか検討すること(研究3)である。</p> <p>次に、第2章「再確認傾向が精神的健康に影響を及ぼすプロセスの検討」では、研究1から研究3を順に詳述している。</p> <p>研究1では再確認傾向と抑うつとの関連性に着目した縦断調査を実施し、抑うつの悪化が再確認傾向を強めるのではなく、再確認傾向の強さが抑うつを悪化させることを明らかにした。この結果は、着目した変数間の因果関係を示唆するものであり、その点において重要な意味を持つ。</p> <p>研究2では Emotionships の観点から再確認傾向と精神的健康との関連について検討している。Emotionships の指標には、感情制御に利用する対人ネットワークの人数・感情領域の広さ・平均人数・個別度を、そして精神的健康の指標には抑うつと主観的幸福感を用い</p>			

ている。一斉教示・個別回答による集合調査を実施した結果、再確認傾向が強いほど抑うつが悪化するだけでなく、感情制御のために利用する対人ネットワークを狭める結果として、主観的幸福感が低くなることが示された。この結果は、再確認傾向が精神的健康を規定するプロセスには2つのルートがある、すなわち Emotionships を介するものと介さないものがあることを示しており、示唆に富む結果である。

研究3では実験室実験を通して当該プロセスを重要他者の特性が調整するかどうか検討している。分析の結果、重要他者が個性を容認する傾向が弱い場合、再確認傾向が強いほど対人ネットワークが狭まり、主観的幸福感が低まるというプロセスが示された。一方、重要他者が個性を容認する傾向が強い場合、このプロセスが成立しないことが示された。個性の容認する傾向は他者の良い点を見つけ、関係を紡ぐ傾向と換言できる。再確認傾向の強い個人は、心理臨床の観点から支援の対象となるケースが少なくない。研究3の結果は、彼ら彼女らの近くに自分の良さを見つけ、評価してくれる他者がいることの重要性を指摘するものであり、その点において学術的・臨床的意義があると評価できる。

最後に第3章「総合考察」では、第1節から第3節で改めて各研究の成果と意義について整理し、第4節では臨床的意義の観点から得られた成果について考察している。そのひとつとして、心理臨床の専門家が再確認傾向の強い個人とカウンセリングを行う際には、本人のネガティブな側面だけではなく、ポジティブな資質や個性にも着目することが重要である点をあげている。

本論文は、再確認傾向と精神的傾向に関する臨床社会心理学的研究として、次の2点において高く評価することができる。

(1) 再確認傾向と精神的健康の関連について対人ネットワーク利用の観点からも説明可能であることを示した点

先行研究では、再確認傾向が精神的健康に影響を及ぼすプロセスについて重要他者からの拒絶という二者関係から説明を行っていた。研究2・3では、感情制御時の対人ネットワーク利用という、より広範な対人関係の観点から検討することで、再確認傾向は重要他者からの拒絶だけでなく、感情制御のための対人資源の不足によって精神的健康が悪化することを明らかにした。

(2) 当該プロセスを重要他者の特性が調整することを明らかにした点

先行研究では、重要他者からの拒絶という直接的で否定的な反応しか扱っておらず、重要他者がいかなる特性を有する人物かについては考慮されていなかった。この点を踏まえ、研究3では個性の容認が再確認傾向の精神的健康に対する悪影響を緩和し、主観的幸福感を高めることを明らかにした。重要他者との二者関係と、それを含めた対人ネットワーク全体との相互影響過程を示すものであり、学術的・臨床的意義があると評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成29年2月7日

